

野口彰*: 日本産蘚類の研究(17)

Akira NOGUCHI*: Notes on Japanese Musci (17)

100) *Gollania subcochlearifolia* Dix. et Thér. in Rev. Bryol. **13** (Trav. Bryol. **1**): 17 (1942) (Fig. 66)

この種の胞子体がまだ知られていないので、分類上の位置に就いては、いくらか問題になるものようである。湿地性のもので、外観では *Scorpidium turgescens* (T. Jens) Moenk. と間違えられる程よく似たものである。また、葉細胞の角隅に著しくない小乳頭のあることも似ている。しかし、*S. turgescens* は葉尖が円味がかつた鈍頭か或は少し尖る程度であり、また、葉の中肋も單一で長く、まれに又分するか双生で、葉の翼細胞は葉しく分化していないが厚膜であるので、*G. subcochlearifolia* とは可成り違つてゐる。この種の性状から矢張り *Gollania* 属に入れておくのが適當であろう。ところが、この種にはもう一つ学名が出来ている。仙台市産について Brotherus が *Drepanocladus splendens* と命名してあつたものを後に飯柴永吉が記載を発表したものがそれである。成

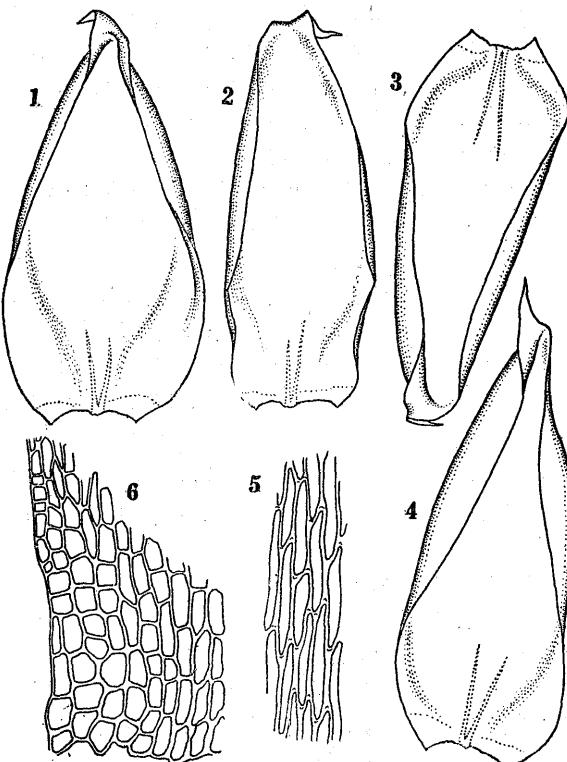


Fig. 66. *Gollania splendens* Noguchi 1~4, stem leaves, $\times 28$, 5, cells from middle of leaf, $\times 294$, 6, basal angle of leaf, $\times 156$. (1, 2 from Sendai, 3~6 from Naruto)

* 大分大学学芸学部 Biological Institute Faculty of Liberal Arts, Oita University, Japan.

東産と仙台市産とは共に不実ではあるが、よく一致する。したがつて、学名には *G. splendens* (Broth.) Nog. を用いることにする。飯柴、Dixon両氏の記載は共に簡単であるので、図とともに追記載をしておく。

***Gollania splendens* (Broth.) Noguchi, comb. nov.**

Drepanocladus splendens Broth. apud. Bot. Mag. Tokyo, **49**: 600 (1935).

Gollania subcochlearifolia Dix. et Thér. l. c.

Plants robust with a *Neckera* habit, in loose yellowish-brown flattened tufts; stems prostrate, reaching 8cm in length 3-4mm in width including leaves, rather densely and somewhat complanately leaved, in upper region subpinnately branched, inferior parts dark brown superior yellowish-green. Branches complanately spreading, simple apex obtuse, the longer ones reaching 15mm long. Stem leaves more or less shrivelled when dry, rather loosely imbricate, oblong-ovate cymbiform, apices rather rapidly but shortly acuminate, and often irregularly reflexed, basal angles not decurrent, hardly undulate nor plicate, reaching 2-2.7mm long, margins involute, entire but indistinctly crenulate above. Costa thin and shortly forked or nearly double, about $\frac{1}{4}$ leaf-length. Median leaf-cells sublinear to linear-rhomboid with thin walls, bearing dorsally indistinct papillae on the cell-angles, 40-60 \times 4-6 μ in diam., superior ones short 20-35 μ long, inferior ones gradually shorter and broader, rectangular, alar ones distinctly differentiated, numerous, larger, hyaline, subquadrate to rectangular with rather thick walls, 20-30 μ in diam. Branch-leaves similar to stem-leaves. Remaining parts unknown.

Specim. exam. Honshu: Miyagi Pref. Sendai-city, Tōshōgū (E. Ishiba, Mar. 14, 1909-typus), Chiba Pref. Nanuto (K. Hisauchi, Sasaoka-2628-typus of *G. subcochlearifolia*, May 9, 1928). Dist. Endemic.

101) *Gollania bipinnata* Dix. l. c.

Dixon の原記載及び金精峰産の標本 (no. 6604) をしらべてみても、この学名のものは *Heterophyllum brachycarpum* に一致し、後者の type locality も近くの男体山である。もつとも、Dixon も *G. bipinnata* の所属については疑問をもつており、葉が上部で鋸鋸齒を有することや、葉が格子状の裏細胞群を有することから *Acanthocladium* 属の種とも考えられるが、子嚢の形や構造からむしろ *Gollania* 属の種だといつている。この種は、日本では広く本州、北海道に分布し、亜高山帯に生活の本拠をもつている。

***Heterophyllum brachycarpum* (Mitt.) Fleisch. Mus. Fl. Buit. **4**: 1177 (1915-22).**

Gollania bipinnata Dix. l. c.—syn. nov.

Hab. Japan (Honshu, Hokkaido). Distr. Endemic.

102) *Gollania perundulata* Dix. l. c. p. 18.

これは伊吹山産を type にして出来た種で、笹岡から Dixon に送られた標本はすでに *Gollania varians* と同定してあつたものである。それで Dixon は *G. varians* だけと比較して、その異同を論じてこの新種を設けたようである。この種は *G. varians* とは確に違う。ところが、この基準標本をしらべ、また、原記載を吟味してみると、*G. perundulata* というのは邦内には広く分布する *G. ruginosa* に一致する。なお、北鮮から知られている *G. neckerella* var. *coreensis* Card. も葉の狭尖部は短いけれども、*G. ruginosa* に近いものである。

***Gollania ruginosa* (Mitt.) Broth. Nat. Pflanz. 1, 3: 1055 (1908).**

G. perundulata Dix. l. c.—syn. nov.

Hab. Japan (Honshu, Shikoku, Kyushu). Distr. Himalaya.

103) *Gollania rhynchostegioides* Dix. et Thér. l. c.

Dixon 及び Thériot の両氏はこの種を設定するにあたつて、広く秩父 (type), 東京都, 近江, 伊予等の標本をしらべている。これらの標本の間には多少の変異があるが、筆者は同一種と考える。この種の特徴は、今日使つている Brotherus の分類による *Gollania* 属の蘚ではなく、*Dolichotheca perrobusta* Broth. と同一種である。

***Dolichotheca perrobusta* (Broth.) Broth. in Engler & Prantl's Nat. Pflanz. 11: 465 (1925).**

Gollania rhynchostegioides Dix. et Thér. l. c.—syn. nov.

Hab. Japan (Honshu, Shikoku, Kyushu). Distr. Endemic.

104) *Timmia megapolitana* Hedw. Descr. 1: 83, t. 31 (1787).

特異な蘚で、少数の種が 1 科 1 属をつくつている。この属の蘚が確に日本に産することは、高木典雄¹⁾氏が南アルプスの三輪村塩沢 (1000~1100 m) 及び大鹿村燕岩 (約 1400 m) 産について、詳しい図と共に発表したのにはじまる。もつとも、桜井久一²⁾氏は *Timmia austriaca* Hedw. が福島県猪苗代湖畔蟹沢に産することを報告しておられるが、この標本は *Dicranum eurydictyon* Besch. である。がんらい、*T. megapolitana* は産地は限られているが広く北欧、シベリア、北米に亘つて分布しているのであるから、その中間地帯に産するであろうことは当然予想されるところである。筆者はここに、秩父自然科学博物館の永野巖氏が秩父で、また、北海道富良野高校の斎藤実氏が北海道で採集したことを追加する。何れも南アルプス産と同じく、石灰岩地帯からの採集品である。

Specim. exam. C.-Honshu: Saitama Pref. Chichibu, Ōchigawa, Nishitani (ca. 800 m) (I. Nagano. Nov. 1951). Hokkaido: Ishikari Prov. Sorachi-gun, Higashiyama-mura, Nishitappu (ca. 1600 m) (M. Saito, Oct. 25, 1953). Dist. N.-Germany, Soviet Russia, Siberia, N.-Am.

¹⁾ 服研報 10: 28 (1953)

²⁾ 植雑 52: 468 (1938)

105) *Orthothecium rufescens* (Dicks.) Br. eur. (Fig. 67)

この種は Entodontaceae (ツヤゴケ科) に属し、特色のある蘚で、ヨーロッパ及びシベリアの石灰質の岩上から知られている。この学名の蘚が日本に産することは桜井久

一³⁾ 氏が秩父三峰産について報告されている。ところが、同⁴⁾ 氏は後に、この同定は誤であるとして新しく *O. japonicum* Sak. と命名されたが、記載は公表されていないようである。この標本は不実で、筆者の検討したのは貧弱であるが、葉の形は桜井氏が図示⁵⁾されているように、狭三角状披針形で葉先は細長くのびている。もつとも、標本では葉の上方が多少偏向しているのが多い。この図では短い中肋が二叉しているが、標本では見当らぬこともあるくらいに弱いものである。葉

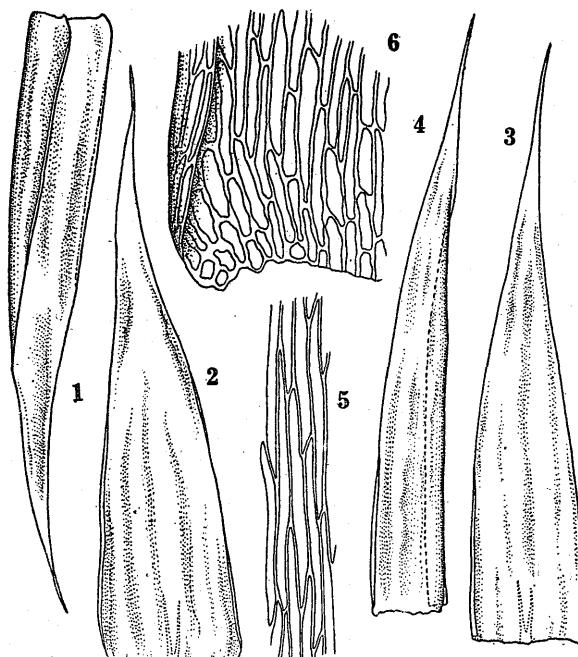


Fig. 67. *Orthothecium rufescens* Br. eur. 1~4, stem leaves, $\times 28$,
5, cells from middle of leaf, $\times 294$, 6, basal angle of leaf, $\times 294$,
(1, 2 from Rashomon, Okayama Pref. 3~6, from Norway)

は溝状に凹み、多少たてにひだもある。これだけの性状からみると、この蘚は *Orthothecium* 属のものであるが、葉細胞の様子は、*O. rufescens* では分化していないのに反して、この標本では格子状の細胞群が明瞭に分化している。この特徴からみると、三峰産は *Campylodonium* 属で、種は Cardot が朝鮮 Diamants 産の不実の標本にもとづいて作つた *C. gracile* Card. にあたるようである。この種は、その後ほかの地方からは知られていなかつた。そうすると、*O. rufescens* は日本の蘚類誌からは除外されることになるが、近頃になつて、井木長治氏は岡山県新見市の中生門(旧草間村)で採集し、また、高木氏は同じく *O. rufescens* と同定された南アルプス戸台川白岩の石灰岩上産を

³⁾ 植雑 50: 262 (1936)

⁴⁾ 日本の蘚類 p. 148 (1954)

⁵⁾ 前出 pl. 58-K

筆者に送られた。筆者も最近、羅生門の現地で、その生育状況をみた、羅生門は周囲が20m位の石灰岩壁で囲まれた狭い区域で空中湿度が非常に高い。この風化しかけた石灰岩壁にしたたる石灰水中に垂れ下っている。体には石灰分が沈殿している。胞子体は見当らない。羅生門産はヨーロッパ産の標本に比較すると、岩壁について垂れているためか、莖は細長くのびて葉が疎生している。

Specim. exam. C.-Honshu: Nagano Pref. Todaigawa, Shiroiwa (ca. 1200m, on limestone) (M. Takaki, Aug. 13, 1950). W.-Honshu: Okayama Pref. Niimi-shi, Rashōmon (ca. 500m, hanging from wet limestone ledge) (Ch. Iki, Sept. 19, 1950 & Aug. 23, 1953, A. Noguchi, Nov. 2, 1954). Dist. Eur. Siberia.

106) *Leptodontium gracillimum* Nog. in Journ. Jap. Bot. 20: 142 (1944).

この種は台湾新高山の標本にもとづいて設けられたのであるが、遙かはなれた秩父の石灰岩地帯でも採集されたので報告する。採集者は服部植物研究所の清水大典氏で、標本は不実である。台湾産に比較すると、秩父産は葉細胞は多少大きいようである。

Specim. exam. C.-Honshu: Saitama Pref. Chichibu, Ōtaki-mura, Hakutaizan-Akazawadake (1700-1800m, limestone region) (D. Shimizu, Aug. 28, 1952). Distr. Formosa.

This species is new to Japan.

□Cain, A. J.: **Animal species and their evolution** Hutchinson's University Library (London) 1954 出版。著者はオックスフォード大学の動物分類の demonstrator 「種」なる範疇について論じ、biological species が最も扱るべきものとする点で Mayr や Simpson に通ずる。polytypic species と種の分化なども論じている。動物の実例が植物を扱う吾々に少々判りにくいことを除けば一読の価値あり。pp. 190. 8s 6d. 470円見当 (前川)

□Hubbard, C. E.: **Grasses** Pelican Book叢書の一つ。1954. 9月出版。英國所産の禾本科についての図鑑兼解説書。一覧大の図と対面になつた解説に記載や分布を掲げるが、語源や人文的なことには触れず。外に科の総論、検索表、形質全況、莖葉及び果実による三通りを用意し、利用殊にローンについて記す。帰化植物は日本と多く共通でありまた欧亜に分布する周北要素も屢々あるから参考とするに足りる。pp. 428. 3s 6d. 200円見当 (前川)

□今西錦司: **ヒマラヤを語る** 白水社 1954. 12月出 1952版年のマナスル偵察の紀行と他の若干の記事、公式のでない気のけない紀行は親しみが持てるし、ヒマラヤの深さと高さと広さを巧みに記す。植物帶を日本のそれと比較したのも理解を助ける。pp. 228. ￥260 (前川)

□Johnson, A. I. & H. A. Smith: **Plant names simplified** W. H. & L. Collingridge Ltd. (London) 1951 出版 増訂2版 シダ以上の主な属についてその名の発音、極めて簡潔な一行解説、語源説明は割に親切、主な種名にも発音と語源を附記、欧米での野生品と温室を含む栽培品が主、科名が付けてないのは少々不便。 (前川)

□湊正雄: **後氷期の世界** 築地書館 1954. 6月出版 バルト海の周辺に明らかな氷期とその後の古地史から説き起して、日本での氷期以後古地史や種の分化などを解説的に述べたもの。北海道で得たデータが骨になつてゐる。日本の第四紀の編年表(第6表)はその結論、これだけはつきりとしたものはなかつただけに分布論や種の進化を扱う人は見逃がしてはすまされない。pp. 219. ￥280. (前川)